

「世界帝国」 大唐帝国の誕生



中華帝国からイスラーム帝国と 並ぶ世界帝国へ発展

隋末期に挙兵した李淵(高祖)は、618年に皇帝となり、長安を都として唐を建てた。第2代皇帝の太宗(李世民)は、隋の制度を受け継ぐ形で唐の支配体制を整備し、その治世は貞観の治とよばれた。続く第3代高宗は、朝鮮半島の新羅と結んで高句麗を滅ぼし、西方では西突厥を討つて、勢力を中央アジアに伸ばし、唐を世界帝国に発展させる。

唐の支配体制は、隋から受け継いだもので、律令格式により国内を統治、三省・六部の中央官制、道、州、県の地方行政を整備し、均田制や府兵制を採用した。また、隋から踏襲した科挙により、門閥貴族の勢力を抑えた。

高宗の皇后であった則天武后は、権謀をめぐらし、高宗の死後、実子である幼帝を退けて自ら帝位につき、一時国号を周と改めた。これに続く武韋の禍とよばれる混乱期を経て、8世紀初めの第6代玄宗の時代に、唐は最盛期を迎える。

玄宗の45年に及ぶ治世のうち、はじめの約30年間は開元の治とよばれる。異民族の侵入に備えて辺境に節度使が指揮する軍団を置き、均田制の衰退につながる府兵制をやめて志願兵を募る募兵制を採用するなどの改革を行った。

楊貴妃の魅力に 傾く帝国

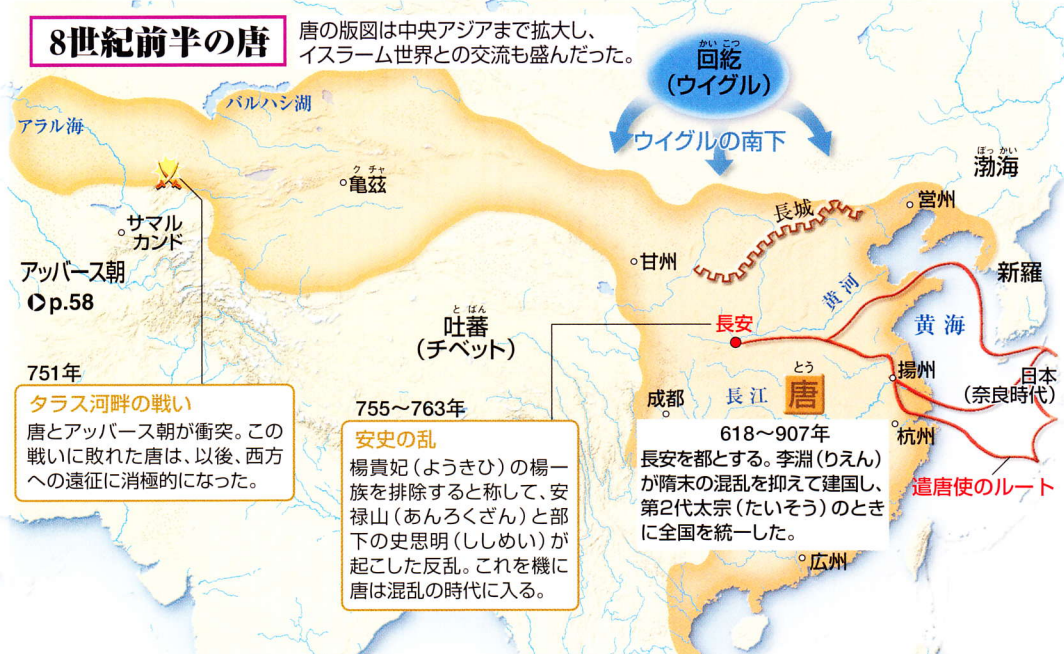
しかし、玄宗は晩年になって楊貴妃を寵愛し、楊氏一族を重用するようになる。3つの節度使を任されるなど大きな勢力となっていた安祿山は、楊氏の排斥を口実に安史の乱を起こし、これ以後、唐は衰退の道を歩む。

安史の乱後は、均田制が崩壊し、農民の所有地や財産に応じて徴税する両税法が採用されるが、これにより、小農民の没落が進んだ。また、節度使の独立性が高まり、中央政権は弱体化した。

9世紀末、塩の密売人の黄巢による黄巢の乱が起こると、またたく間に全土にわたる農民反乱へ発展した。

907年、節度使の朱全忠が後梁を建国。30年近く続いた唐は滅亡し、五代十国の時代を迎える。

隋を継承した唐は、中央集権体制を整備し、中央アジアに達する広大な版図をもつ世界帝国へ発展する。しかし、安史の乱を境に衰退へと向かう。



8世紀前半の唐

唐の版図は中央アジアまで拡大し、イスラーム世界との交流も盛んだった。

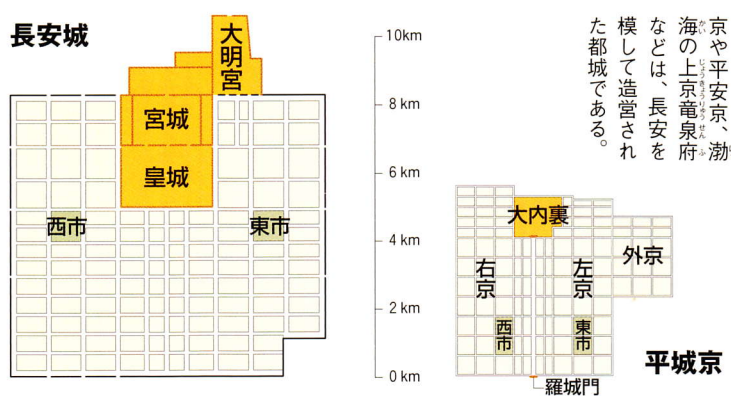
751年
タラス河畔の戦い
唐とアッパース朝が衝突。この戦いに敗れた唐は、以後、西方への遠征に消極的になった。

755~763年
安史の乱
楊貴妃(ようきひ)の楊一族を排除すると称して、安祿山(あんろくざん)と部下の史思明(ししめい)が起こした反乱。これを機に唐は混乱の時代に入る。

618~907年
長安を都とする。李淵(りえん)が隋末の混乱を抑えて建国し、第2代太宗(たいそう)のときに全国を統一した。

人口100万の国際都市 長安

唐の都長安(現在の西安)は、東西9・7km、南北8・2kmの方形を壁で囲み、碁盤目状に道路を走らせた都城で、最盛期には人口100万を数えたと推定される。当時、西域を経由する貿易がさかんで、長安は各地の商人や旅人たちがぎわう国際都市であった。道路で囲まれた街区を坊とよぶが、坊内には住居のほか、仏教、道教、イスラーム教など各宗教の寺院が建てられていた。また、東西に各種商店や工房のある市も設けられていた。日本の平城京や平安京、渤海の上京龍泉府などは、長安を模して造営された都城である。



Key Word
楊貴妃
[719~756年]

唐の玄宗の愛妃。美貌と才知により玄宗の寵愛を受けた。一族の楊国忠(ようこくちゅう)は宰相に出世するが、楊一族の専横が国の衰亡を招くこととなった。755年、安史の乱に際し、玄宗・楊国忠は楊貴妃をともなって四川に逃げようとするが、その途上、反乱兵士が国忠を殺し、玄宗に対して楊貴妃殺害を迫ったため、玄宗はやむなく楊貴妃を自殺させた。